

水上勉

父
子

下



父と子下

定価 一〇〇〇円

一九八一年一月二十日第一刷発行

一九八一年三月二十日第三刷発行

著者 水上 勉

発行者 初山有恒

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二

電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇―一七三〇

目次

磐井川の岸 5

盛岡神子田町 51

かの路傍のすて石よ 116

阿慈町立火葬場 165

装
幀

司

修

父
と
子
下

磐井川の岸

1

一関駅前から、繁華な商店街を五十メートルほど行った先に、駐車場付の看板を掲げた「磐井」という旅館があった。以前にきた時、古い三階建ての一関館に泊った記憶があつて、そこを探したが見当らない。それで、目についたこの和風旅館へ入った。和風といっても、半分は洋風のモルタル塗装の玄関で、商人宿といった感じに魅かれたのだった。玄関を入ると四十年配の女中が出てきて、裏の駐車場へ案内してくれ、子を連れているので信用したか、急に愛想よく庭の見える風呂付の八畳へ通された。

「一関館は、がんびけい巖美溪へ越されましたです」と女中がいった。

巖美溪ときいて、藤子と亭主の石山佐吉と行楽にゆき、平泉の方へ馬車に乗ったことを思い出した。「一関もずいぶん変りましたです」

女中が、淋しい口もとをなごめて茶を淹いれてくれる。竹一は、ホテルとちがった和風宿に格別の親

しみをおぼえた。

女中が部屋を出たあと、すぐ藤子の家へ電話してみた。

「おそかったでねえの」

なつかしい高声だった。

「会津から電話があったすけ、待ってたんだよ。花巻で手間かかったのかね。いまどこにいるんだ」

「駅前の磐井って宿で、高志もいっしよだ。とにかく、運転でつかれたから一服して、それから、おめの都合もきかねばと思ったんだよ。佐吉さんはまだ役所か」

「病院だね」

藤子の声が急に落ちこんだ。

「病院？」

「んだよ。胃潰瘍で先月の末にへって退院できねんですよ。酒も吞まねのに、そしたらところが変わるぐてはあ」

竹一は、胸の血がかすかにひいてゆくのがわかった。

「看護は誰がしてるんだ」

「病院は完全看護だから心配ねえんだ……」

何も知らずに梅三と、藤子がいけば幸福者だ、と云いあっていた昨夜のすき焼きの席がかえりみられた。

「そったらこと、おめなーんもいわねから、おらたち、暢気におめのこと噂してたんだよ……」

「梅兄ちやもそったらことへってだ」

藤子はわらった。その笑い声が、いまひいた血をまた、しずかにのぼらせる。

「なら、おれ、佐吉さんを見舞いたいし、おめの顔も見たいしき、……ちよつくら、行つていいか」
「かまわねよ。すぐ来て、兄ちゃ」

藤子は喜悦の声をあげて、

「こつちさくろ道わかつてるかね。磐井川の橋わたつて、土堤の道を、ずうつときて、四本めの道を右さまがるんだ。わかるかね」

「おぼえてる……ま、行つちみる。田圃の中だったな」

「田圃はもうねえよ、兄ちゃ」

藤子はいった。

「家がびつしり建つただすけ。おら外へ出て待つて。早ぐ来てよ、高志さんもいっしょにね」

「うん」

藤子が受話器をおく時泣いたように思えた。竹一はわきにゐる高志に、

「藤子叔母さんの旦那は病院だったよ」

「……………」

「なーんも知らなかった。胃潰瘍で入院してるんだつてさ」

高志も、顔をくもらせる。

「とにかく早く家へ行つて、様子きくことにしよう。おめ、その本をみなもて」

「うん」

卓子の上に置いた、児童文学全集の『宮沢賢治篇』『坪田譲治篇』『石森延男篇』の三冊を紙袋に入れ、急いで部屋を出た。帳場に来て、タクシーをたのむと、はす向いがタクシー会社だと教えられ、歩いて、そこまでゆき、洗車していた空車に乗った。

田町の住宅地は、もとは水田地帯だったところを、盛り土して宅地化した一角で、以前に來た時は、

畑や水田が多かったのに、家は建てこみ、藤子のいる平家長屋も、新築らしい二階家が目立った。途中に、スーパーマーケット、美容院、そば屋などの、商店も出来て、まったく閑静だった昔の面影はない。

商店街をはずれた頃、前方に娘をつれた藤子らしい女が立っていて子はふたりいた。梢と一枝だなと竹一は思った。高校一年のはずの長男は松男で、佐吉が、阿慈の父が子に花の名を冠した命名に因んで、木の名をつけたと藤子からきいた。もともと、女房閨白の家だ。藤子の思いつきが半分以上あつてのことだった。

タクシーが近づくとき手をあげていた。藤子は丸首セーターの上に紺のカーディガンを着、裾のひろがった黒のスラックスをはいていた。運転手に料金を払っていると、藤子は近づいてきて、

「よく来てくれたね。子供らの顔もわすれたでしょ。大きくなったでしょ」

阿慈の母に似た空をむいた愛嬌のある丸鼻の上に小じわをよせ、

「高志さんも大きくなったな」

と眼を細めた。東京で会ったのは四年ぐらい前だった。心もち肉のついた太尻、首も太くなって、貫禄の出た年増姿に先ず面喰らった。そばできょんとこつちを見ている娘が中学生と小学校上級に成長しているのだ。

「倍ぐらいに大きくなってる」

と思わずいった。

「高志も高二だ」

竹一は、佐吉に似て眉尻のさがったたれ眼の娘たちにかわるがわる紹介した。

「町の様子がすっかり変っちゃってた」

「んだよ」

藤子が歩きはじめた。

「おれがきた時は、まだ田圃の中の長屋集団だったよ。どこの庭木も低かったが、たった十年ぐれえで、こつたらに大きくなるもんかね」

「うちの生垣も高くなつてるよ」

藤子はいった。

「竹一兄ちやがきた時は、ひっこして間がなかった頃だから……一枝が生れてすぐだったもの」

「んだな」

その石山佐吉の家は、二筋目を左へ折れた高みにならんで建った平家だった。家の前にきて、佐吉とふたりでつまった溝を大掃除した日のことを思いだした。下水のはけのわるい一角なので、家前のU字溝に蚊がわくほど古水がたまっていたのだ。

2

「松男くんはいねえの」

「いま使いに、やった」

と藤子がいった。

「よくやつでくれるのよ」

「そうか、それはたのしい。高志より一つ下だと思っだが」

「高志さんは五月だし、松男は翌年の十月なもの」

「んだったかな、父ちゃんどうかね。胃潰瘍って、胃の壁がどうかなってるってわけでもないんだろ」

「レントゲンやつたり、バリウム吞まされたりして、検査うけてンだけどね、わるいんだわね。あ

の人は甘いもの好きだし、もともと胃の弱いタチなのよ。それが、役所が忙がしいもんで、疲れて帰るでしょ。食事もすまなくて、痩せではあ」

藤子は玄関を入って、見おぼえのあるわきの応接室をかねた四畳半の洋室へ通した。いまは市の社会教育課にいる、一時は公民館にもいた佐吉が、趣味で集めたこけし人形が、五十ばかり、棚にならべてある。この応接間は、ローンで買った平家に、佐吉がつけ足したもので、市内の繁華街にいる佐吉の父親が金を出してくれたときいた。グレーの古い応接セット。ガラス板の卓子。清潔なのは藤子の性分だが、破綻のない地方吏員を、地味につづけてきた男の匂いが、部屋に充ちている。

「完全看護といってたが、市内の母さんは」

「時々向うであうけどね。あっちも孫がいるし」

藤子はいった。

「それに、兄さん、なんやかや店ふやして、手をひろげてるのよ、母さんたちも忙がしくでね……やっぱり、おらがやらねと」

「それはそうだ。おめが女房なんだから」

藤子は、うん、とうなずいたが、視線をずらせて、よこを向いた。眼が光ったように思えた。夫の看護と、三人の子の世話で、疲労している様子がわかる。

「おめも苦労だな」

と思わずいうと、

「苦労はしてねよ」

とこつちを見て、

「ちっとも、落胆してねよ。子供らも世話はかからねし、毎日、病院へ顔を見せてけえってくるのが仕事だすけ……」

無理にわらうのがわかった。意地っ張りなところはあったのだ。

「まあ、おめが元気で、兄ちゃはほつとした。ゆうべは梅三とすき焼き喰って、桐二のはなしやら、百合あねのはなしだあとで、おめのはなしだ。梅三がいうに、兄姉妹のなかで、いちばん幸福者だつて。おらもそうだへつてたのに……まさか、父ちゃんが病院にへつでるとは思わねかつた。だども、おめがそつたらに肥つてて安心した」

「減食で、痩せよと思つても、ちつともおら痩せねんだね。おかしいね。阿慈の母さんてひとは、こつたらに肥つた人だつたか。兄ちゃ」

「肥つてなかつたよ。そうだな。百合あねぐれえかな」

「百合あねは、背が高くてスマートでしょ。おらとはちがうもの……」

「高志さんは、父ちゃん負かすほど体格がいいでねの……学校でスポーツやつてるんでしょ」ときいた。

「ううん」

高志はまごついて、

「なーんもやってない。一年生の時は野球やったけど」

「おらの松男も野球やりたぐて……」

藤子は、そこで廊下の方へ声をあげた。

「みなこっちさこねか」

梢と一枝が入ってきた。

「おめたちも仲間に入れ」

藤子は、いくらか、持ち前の調子が出たようで、高声になって、

「きょうは、東京のオジさんといっしょに食事をするんだ、みんな台所手つだってよ。兄ちゃんが帰ってきたら、母さんすぐはじめるから」

そういつて、

「なーんもごちそうはねえんだけど、竹一兄ちゃんもいっしょに食事していっでよ」

はしゃいだ声が淋しそうにも耳をうつので、

「なら、ごちそうになるかな」

と竹一は、用意してきた三冊の本を卓子に出した。

「おもしろい本だぞ」

梢と一枝が同時に手をのばした。

「東京のオジさんは、本屋さんだ」

藤子は娘たちにいった。

「本屋さんでも、いい本ばかり売る本屋さんだ。そうでしょ。兄ちゃん」

「たてまえは、そうだが……まだ一人前になるとはいえねえ。なんやかんやあって、ひまなもんだから、高志つれて、逃げてきたようなあんなべだ。な、高志……」

「暢気な旅行が出来で、いいでねの、おばさんうらやましい」

と藤子は高志にいった。

松男が帰ってきた。藤子が玄関で買い物を受けとって、すぐ、その松男を竹一たちの部屋へつれてきた。額のせまい、眉のさがった造作は佐吉のもので、藤子に似たところは、耳のふくよかさだろう。見ちがえるほど大人っぽくなった松男ははにかみをうかべてお辞儀した。

「久しぶりだな。以前にきた時は、まだ小学校さへっただぐらいだった……大きくなって」

台所へ去った藤子が、子供らを手つたわせて、食事の仕度にかかるのがわかった。と、すぐまた、

藤子がきて、

「風呂が沸いてるんだ。よかったら入っていつで」

といった。竹一は、首を振って、

「風呂は旅館で入るから。しばらく、おらたち川の方へ行ってくる」

といって、高志をつれて磐井川の岸へ出たのだった。

川岸へ出るのに、十分ぐらいかかった。住宅地を竹一と高志は歩いた。藤子が、いくらかやつれた顔を、明るくつくろっていたのが気になった。ただの胃潰瘍なら、入院もそう長びかないだろうに、一カ月近いのは佐吉の病気に理由があるからだった。

「わからねえもんだべ。佐吉さんが入院してるなんて、ゆめにも考えてなかった。藤子おばさんの顔いろから想像すると、だいぶ長びきそうな気がするな。あしたは、見舞わねばなんね」

竹一は、ころなしうつろになる自分がわかった。藤子が、夫の看護で、必死になっているところへ、何も知らずにやってきたうしろめたさが湧いた。

「おめおぼえてるか、佐吉さんが出張で戸井町へきた時のこと」

「ちよっとだけ……」

と高志はいった。

「ずいぶん前だったな」

「……四年ぐれえ前だったかな」

当時も社会教育課にいて、佐吉は、公民館事務の講習にきたといった。出張の場合は、安く泊れる県の寮があつて、そこで三泊しての帰りだった。眉尻のたれた、人の好い童顔をにこにこさせ、

「世の中には、ひでエ講師もいるよ、義兄さん。本のきらいな子供に、本を読ませるためには、図書室に絨毯は敷いて、寝ながら読めるようにしてやらねばなんねってへっだよ」

公民館に併設する児童図書室のことではなした時だった。竹一はまだ、いまの事業をはじめるつもりがなく、東京レディメードにいた。講習の内容が、地方都市の公民館経営にかかわっていて、いまはどこでも併設している図書館のことだった。本ばなれてゆく子供に、どうして本に馴染ませるかの方法として、従来の図書室を固くするらしいものから解放して、子供に魅力をもたせる必要がある。絨毯を敷いて、寝ころべるようにするぐらいの環境づくりが肝要だ、とその講師はいったそうだ。

「絨毯に寝ころんで読むへっだって……すぐ睡くなるでねえか」

「睡くなれば睡っていいっていうんだね。大人だってうちにおれば寝ころんで本は読む。いやになれば、放り出して寝たっていい。子供にだけ厳格を強いるのは儒教思想の名残りだって……こつたらふうにいうんだな」

佐吉は、こめかみの静脈を浮かせて、

「おら、一関へ帰って、上司にこつたらこと報告しなければなんねんだよ」と口をまげた。

児童の本ばなれの問題は、新聞や雑誌でよくいわれていた。テレビや漫画に集中する子を、活字に親しませるにはどうすればいいか。地方都市の吏員が、真剣な眼ざしで、そんなことをいうのに興味をもった。佐吉は、社会教育課員が長いので地方の文化全般にわたって、走りまわっているといい、最近では、公民館も、のど自慢、かくし芸大会、浪曲道場などに人気が出て、芸能色をつよめてゆくといった。年寄りが、ゴーゴー教室にくる。大人がこんなふうには、公民館を使えば、いきおい、子供も、児童図書館とは名ばかりの読書室で、本に親しむ気風がうすまるのは当然だといひ、

「そばで音楽が鳴ってねえと、本が読めねえ子がいるんだな。おらだちの子供の時とまったぐちがう。おらだちは、本を読む時は、ちゃんと机に向って、腰かけて、背をのびしてねば先生に叱られたし、本をまたいだりするとどなられたもんだ。それが、いまの子は、新聞雑誌は足でふむし、本はまたぐ